

令和6年度第4回京都市市民参加推進フォーラム会議 摘録

【開催日時】

令和7年3月25日（火）午前10時～午後0時20分

【開催場所】

京都市役所本庁舎4階 正庁の間

【議 題】

- (1) 次期京都市市民参加推進計画の方向性について
- (2) 来年度の京都市市民参加推進フォーラムの取組について

【報告事項】

- (1) 市民参加に関する主な事業について
- (2) 市民参加に関連する令和7年度予算案について
- (3) 新たに設置された附属機関等について

【出席者】

12名

（乾座長、白水副座長、村田副座長、荒木委員、岡田委員、竹田委員、千葉委員、並木委員、西澤委員、平田委員、松井委員、森実委員）

【議事内容】

1 開 会

（SDGs・市民協働推進部長あいさつ）

2 議 題

(1) 次期京都市市民参加推進計画の方向性について

<事務局>

（資料1に基づき説明）

<並木委員>

評価結果を一覧表にまとめたことにより、それぞれの施策について、どれくらいできているのか、どれくらいのことにはチャレンジしようとしているのかがわかりやすくなった。また、知る、深める、参加する、拡大するといった行動ごとに分類しているので、行政や市民がそれぞれの施策にどう関わるのかイメージしやすくなった。

評価結果について、○△□をつけているが、例えば、△だったところは何故△になったのか議論していきたい。やり方の問題だったのか、実はそれほど重要でなかったのかということもあるかもしれない。この表も活用しながら、次期計画に向けた検討を進めていけばよいのではないかと。

<白水副座長>

一覧表になり、整理されて考えやすくなった。今後、次期計画の策定に向けては、施策や事業を検討するときに、同時に、量的、質的な変化をどう捕捉するのか、評価をどうするの

かも考えていけばいいのではないか。

<西澤委員>

一覧表で評価が可視化できたことにより、わかりやすくなった。今後、具体的に1つずつ△や□の評価になっているところを、どうすれば○になるのか整理していく必要がある。また、次期計画を策定する際に、この○△□の評価をどう活用するのかを考えると、例えば、△□のところを重点的に取り組むといった考えも出来るのではないか。

<竹田委員>

一覧表では、市民による情報発信とか。人とのつながりによる参加の推進の項目が、「きっかけ」に分類されているが、「行動」に分類されてもいいかと思う。市民による情報発信であれば、受け取る側はきっかけの段階であるが、発信する側は行動の段階である。また、表の見せ方として、きっかけ、対話、行動、挑戦の流れが、だんだん深化するような形で整理した方がわかりやすいかと思ったので、今後そのあたりも確認していければ。

<乾座長>

この表は、作って最初の段階だと思うが、今後、修正はできるのか。

<事務局>

評価自体、4月に実施するアンケート結果を反映することになるため、いずれにせよ修正は必要になる。

<森実委員>

計画を評価した時に、こういったデータが必要ということもあったので、次期計画を検討するときには、必要なデータの取得についても一緒に議論出来ればよい。

<並木委員>

マトリックスの見せ方として、意見が分かれるところかもしれないが、情報提供から段々進んでいくとまちづくり活動に挑戦するといったイメージで、右肩上がりになるようにグラフを作るとイメージしやすくなる感じた。

<松井委員>

市政参加と市民のまちづくり活動が別になっているのではなくて、まちづくり活動の延長線上に市政参加があったりするるので、次期計画でも市政参加とまちづくり活動を分けずに一緒にするほうがよい。

<事務局>

(資料2に基づき説明)

<荒木委員>

問1又は問5の選択肢で、NPO法人としての活動とか、企業としての活動といった具合に「としての活動」という表現となっており、運営するくらいの関与度を想起させてしまう。ボランティアとして参加するくらいの回答も拾いたいのので、「による活動」ぐらいの表現にしてはどうか。

もう1点、選択肢に「個人としての活動」という括弧書きはいらぬのではないか。個人として参加したとしても、その先には様々な人と会う機会があり、個人の活動にこだわる必要はない。特に、新たに追加したゲーム等と連動した活動に関しても、個人での参加に終始するのはもったいない。さらに、ワークショップやゲームを通じて、まちづくりについて、楽しく学んだり、課題を話し合ったりするような活動も拾える選択肢があった方がよい。

<事務局>

個人としての活動の括弧書きについては、自治会やNPO法人に所属している方が、団体が開催する清掃活動や寄付行為と、個人で実施するものとを分ける意図があると考えている。ゲームと連動した活動については、荒木委員の指摘どおりであり、検討する。

<松井委員>

まちづくりカフェ事業は誰もが知っているものではなく、市民も自分が参加している事業がまちづくりカフェ事業なのかわからないのではないかと。選択肢に、もう少し説明を加えた方がよい。

<村田副座長>

問16の人や団体とのつながりを聞く設問について、選択肢3の自治会・町内会にご近所の方も含めた方がよい。また、オンライン上のつながりを聞く選択肢も加えてはどうか。

もう1点、アンケート以外の意見聴取に関して、ひとつのアイデアであるが、まちづくりカフェ事業でQRコードを配れば、その場にいる積極的に活動している層からアンケートを取れるのではないかと。

<並木委員>

設問16について質問がある。これは、市民参加している人の相関関係を調査することが目的とのことだが、どういう相関関係を見ようとしているのか。

例えば、アンケートで市民参加している人ほど、つながりを感じているという結果が出た場合、市民参加が進むほど、つながりを感じている人が増えると考えればよいということなのか。

また、設問16で、つながりを感じる場面として、何か困ったときのみでいいのか。例えば、何かを始めたいときとか、日常生活を送っている中で気づいたことを共有したいとき等が考えられる。どういった意図でこの設問を作ったのか聞きたい。

<乾座長>

つながりがある人とつながりのない人が、それぞれ、どういった市政参加やまちづくり活動をしているのかといった相関関係がわかるのではという意図で1つ設問を加えた。

<並木委員>

面白い試みである。アンケートの結果、相関関係が見えれば、つながりを感じている人を増やすことが市民参加する人を増やすことにつながっていく。現在は、つながりを感じていない人につながりを感じてもらうことは、それぞれのコミュニティに委ねられているところ、知見を得られることで、政策にフィードバックできるのではないかと。

<乾座長>

市政参加に関して、市役所・区役所に直接意見を言う、或いは、自治会・町内会から間接的に意見を言うといった選択肢がない。こういった、敷居の低い市政参加の選択肢を加えてもらいたいと思うがいかがかと。

<事務局>

市役所・区役所に直接意見をいう制度であれば、「市長への手紙」がまさにそのための制度であり、ホームページからでも簡単に送ることができ、年間で結構な数の「市長への手紙」が利用されている。

<村田副座長>

この設問は、市政参加の「制度」の利用を問うものであり、直接市役所・区役所意見を言うというのは、制度に当たらないのではないか。それで言うと、選択肢の市民が市政情報を発信するというものも制度には当たらないと思う。

<乾座長>

この設問を制度に限ってしまうと、敷居の低い市政参加が拾えなくなってしまう。制度に限らずに聞くこととし、直接市役所・区役所に意見を伝える、自治会・町内会等の団体を通じて意見を伝えるという選択肢を加えてはどうか。

<事務局>

新たに選択肢に加えるということであれば、他の選択肢の経年変化を見られるので問題ない。ただし、市長への手紙の選択肢のところは、「市長への手紙」の文言を残した形にして、前回調査からの変化が見られるようにしてはどうか。

<乾座長>

時間も無くなってきたので、アンケートは座長預かりとさせていただきます。

<並木委員>

次期計画の構成イメージについて、市民参加に関する情報を知った人が、対話で深めて、参加して、拡大してといったイメージはわかりやすいと思う。こういった表現のほか、先ほど、評価のところでもお話した右肩上がりのようなグラフでも表現できそうだと感じた。それぞれの段階で独立して実施しているのではなく、徐々にステップアップして、より高い目標を目指すということが伝わった方がよい。

個別の施策をどうするかは議論が必要であるが、限られたリソースを配分するにあたって、次の5年間の優先順位についても、議論してはどうか。

例えば、現行計画のような重視する視点のように示して、それを優先項目として実施して行くということもできるのではないかと考えた。また、今年度実施した高校の授業のように、そこにフォーラムとして積極的に関わっていくということもできるのではないかと思う。

<乾座長>

優先順位の設定は、難しくて悩ましい所ではあるが、現行の計画でもKPIを設定しているが、総花的になっている。優先順位に関して、事務局としてはどうか。

<事務局>

市民参加推進計画の施策は、スライドでも構成をお示した通り、相互に影響し合っている。例えば、施策のうち、「市からの情報発信」については、全ての市民参加施策に大きく影響している。そのことを踏まえると、施策に対して優先順位を設定するのではなく、重要な視点のような形で、施策横断的に設定してはどうかと考えている。

<千葉委員>

施策9に関して、結節点となる職員を育成するとなっているが、この職員というのは、市の職員か、それとも民間人材なのか。具体的にどういったことをイメージされているのか。

市の職員は人事異動で人が変わって継続性がないという声を聞くこともある。ジョブ型雇用などもやっていくのか。

<事務局>

これは、市の職員を育成し、研修を受講した職員が、まずは自分の本務の中でスキルを発揮してもらうことを想定している。また、千葉委員のおっしゃるとおり、職員に限らず、民

間にも結節点となるスキルのある方はたくさんいらっしゃる。

<岡田委員>

次期計画の策定に関して様々提示していただいているが、加えて、計画を推進していく際に、1年ごとに振り返りをするための方向性のようなものも併せて掲載できれば、わかりやすくなる。

(2) 来年度の京都市市民参加推進フォーラムの取組について

<事務局>

(資料4に基づき説明)

<乾座長>

事務局から3つの方向性が示されたがいかがか。

<竹田委員>

説明にあった①・②の機会があったほうがいいと思うが、計画策定のスケジュールとは別にオンされるとなると、アンケート分析など計画策定に向けた議論もやっていく必要があるので難しいところ。もし今年度のような交流会をやるなら、次は高校生や大学生ではない20代などにも広げていければ。

<乾座長>

イベントを運営する場合、委員に相当負荷がかかる一方で、計画策定に向けた提言書の作成には骨が折れることも考慮する必要がある。

<竹田委員>

提言書作成に向けて、対話型パブリックコメントを実施するのはありだと思う。

<千葉委員>

非イベント型に賛成。イベントは人集めなど手がかかるため、それよりはどこかに出向いて意見を聞きに行くほうがよい。

<乾座長>

非イベント型で、提言書作成の中でポイントとなるタイミングで意見聴取に行く形かどうか。

<白水副座長>

年間のスケジュールを考慮してボリュームゾーンを設定するのもあり。年度当初はアンケート関係検討などがあるので、その後どこかで集中的に出張型パブコメをするなど。

<乾座長>

例えば、アウトカムや目指す未来像に関する議論が終わったタイミングで、ユースサービス協会などに出向いて対話型で若者に意見を聞くなど、非イベント型で進めるという形でもいいか。

(異論なし)

3 報告事項

(1) 市民参加に関する主な新しい事業、市民参加に関連する令和7年度予算案について

<事務局>

(資料5・6に基づき説明)

<松井委員>

深草支所が開催した市民対話会議に参加したが、会場が龍谷大学なのがよかった。場所は大事だと思う。区役所の会議室でやるといかにも会議という印象になってしまう。

<乾座長>

最近では大学でも色々なワークショップが開催されている。良い空間で、クリエイティブな発想で、という場のデザインという意味では、大学を活用するのはよい。

<白水副座長>

つなぎ手人材に関連して、今、色々なファシリテーター・コーディネーターのような方がいるので、そういった人たちも洗い出して、内外で繋がりや情報共有などができる場面ができればよい。

(2) 新たに設置された附属機関等について

<事務局>

(資料7に基づき説明)

4 閉会

<事務局>

村田副座長、平田委員、三宅委員については、今年度末で任期満了を迎え退任される。また、来年度は計画策定の重要な年であることを踏まえ、乾座長に引き続きもう一年座長を務めていただく予定である。

(異論なし)

以上で本日の第4回会議を終了する。